

## ピジンと漢字——中国における交易言語

復旦大学歴史学系特聘教授 高 田 時 雄

世界四大文明という言い方がある。メソポタミア、エジプト、インダスそして黄河文明である。これらの地域では、それぞれ肥沃な生産力によって大きな人口が支えられ、やがて階級が分化し、都城の形成が行われた。これら古代文明にはまたもう一つの共通点として文字の使用がある。なかでも黄河流域で発展した独特の文字、漢字は中国文明を色濃く特徴付ける重要な要素となった。他の地域とは異なり、中国には漢字に取って代わるような文字体系がその後長く出現しなかったのと、地域ごとの言語の相違を表意文字である漢字により克服し得ることから、あらゆる事柄を漢字によって書き記すという強固な伝統が次第に形成された。かくして中国では、文字表記に重点が置かれ、口頭による伝承はすこぶる衰退することになる。中国文明が一面において漢字文明の様相を呈するのは、こういった背景がある。

さて眼を広く世界に向けてみよう。大航海時代の幕が切って落とされた十五世紀末から、スペイン人やポルトガル人などイベリア半島を出航した商人たちが新大陸やアフリカ、アジアの港にその足跡を留めるようになったが、かれらと現地人のあいだで意思疎通のために用いられた言語はピジンと称される一種の混淆語であった。基礎語彙としてはスペイン語やポルトガル語を使用するが、文法は極めて簡素化され、相互理解に必要なだけの規則によって成り立っていた。その場限りの一時的な、そして何よりも口伝で習得されるという点が大きな特徴である。そしてこの種のピジンが世代を経て継承されるとクレオールと呼ばれることがある。

中国では十六世紀以来、広東省のマカオをポルトガル人が明朝から租借し居留地としたため、この一帯で用いられる言語は当初ポルトガル語を基礎としたクレオールであったが、しだいにイギリス人が中国貿易の主導権を確立すると、この言語の語彙は英語に置き換えられ、いわゆるピジン・イングリッシュが成立した。さらにアヘン戦争の結果、南京条約によって中国各地に条約港が設けられ、なかでも上海が格段に重要な地位を占めるようになると、上海に移入されたこの言語は「洋涇浜英語」と呼ばれるようになった。中国におけるピジンを云うこの表現は、交易の舞台であった上海黄浦江につながるクリークの一つ「洋涇浜」(ヤンチンパン)に由来する。しかしすでに広東で用いられていた頃から、中国人のあいだではこの交易言語を学習するためのマニュアルが作成さ



図一

れ、流布していた。ごく簡単な語彙を収録しただけの、たかだか十葉にも満たないこの冊子は『紅毛通用番話』(図一)などという書名が付され、木版印刷によって大量に出回った。もっぱら外国商人と取引を行う広東十三行の商人や外国人に雇われるボーイなどは、このマニュアルによって懸命にピジンを学習したのである。二、三の例を挙げると、マニュアルでは、見出し「醫生」に対して「得打」(dek-da = doctor)、「裁縫鬼」に対して「爹利文」(de-lei-men = tailor-man)、「剃頭匠」に対し「吧罢文」(ba-ba-men = barber-man)、「鬼廚」に対し「谷文」(guk-men = cook-man)などとピジンの語形が注してある。広東語の漢字音を用いて音訳したものであることは言うまでもない。日本語ではそれぞれ、医者、仕立て屋、散髪屋、料理人の意味で、

「鬼」がつくものは外国人のそれを指すのであろう。英語など外国語を、当時の中国人は「鬼話」と言っていた。カッコ内には黄錫凌『粵音韻彙』(1940年)によって広東音を表示し、そのあとにピジンの語形を示しておいた。ピジンの形式はできるだけ英語の正書法に合わせて書いてあるが、中国人はあくまで漢字を一字ずつ広東音によって読んだことに注意されたい。だから他の例を挙げれば、動詞「裝」(to pack)は「拍忌」(pak-gei)、「打」(to knock)は「匿忌」(nik-gei)というふうに、本来の英語なら-kと詰まって発音するはずだが、中国人はそれぞれ母音を付けてパッキー、ニッ(ノッ)キーと発音したのである。また上掲の例が典型的なピジンであることは、doctorはともかく、tailor、barber、cookのように職業をあらわす語にすべてmanをつけてあることからわかる。こういった接辞の一般化はピジンの大きな特徴であった。

時代は恐らく『紅毛通用番話』などと同じころまで降ると思われるが、ポルトガル語語彙を基礎とするクレオールについても同じようなマニュアルが刊行されている。『澳門番語雜字全本』（図二）がそれで、現在ベルリンの図書館に所蔵されるものが現存する唯一の本である。『紅毛通用番話』、『澳門番語雜字全本』ともに表紙に描かれた人物が全く同じ姿をしていることが目を引くが、両者に共通の出处があることは明白である。また一は省城すなわち広州の璧經堂、一つは同じく省城第七甫（地名）の五桂堂の出版、両者とも通俗書の出版で名のある版元だが、出版年次もおそらくそう変わらないであろう。この人物像そのものはマカオの地誌として有名な印光任・張汝霖『澳門記略』（1751年）下巻の巻首に掲げられた「男蕃図」



図二

が藍本である。したがってもとはポルトガル人を描いたもので、厳密に言えばピジンのマニュアルに用いるのは適当でないが、そんなことは気にしなかったものと見える。むしろ注意すべきは語彙の取り替えによってピジン・イングリッシュが成立したあとも、ポルトガル系のクレオールは滅びたのではなく、まだ一定の学習者が存在したことであろう。いずれにせよ『澳門番語雜字全本』のほうも語彙は広東音による漢字で注記されていることはいうまでもない。これらマニュアルの起源はピジン乃至クレオールの通用範囲がまだ広東地域に止まっていたころであって、南京条約（1842年）により、これまでの広州に加えて福州、廈門、寧波、上海などが開港されると、たとえば上海でも同様のマニュアルが作成された。しかしその場合には使用者は主として上海人であるから、漢字音訳には当然上海の発音（呉語）が用いられたことはいうまでもない。

以上は南方におけるピジンについて述べたのだが、実は同じような情況が北方辺境にも見られたことはあまり知られていない。以下にそのことについて簡

単に紹介しよう。

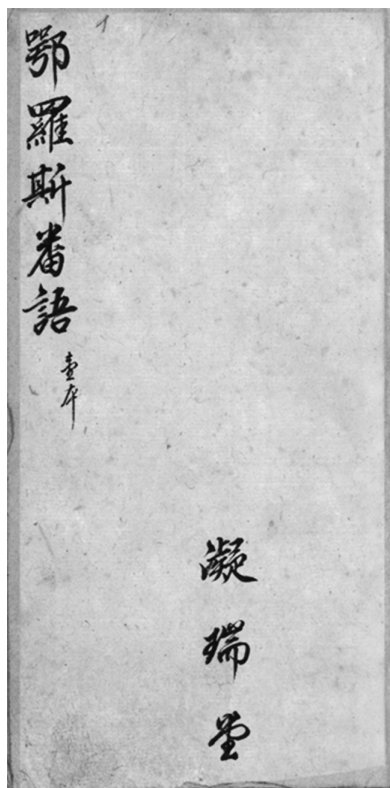
十七世紀半ばに中国全土を支配下に置いた満州族の国家清朝と、北方からの進出をもくろむ新興ロシア帝国とのあいだで接触、交易が行われたことは自然の勢いであったが、その交易地は必ずしも一定しておらず、清朝のコントロールは様々な側面で困難に直面した。そこで雍正五年（1727年）にロシアと清国のあいだに「キャフタ条約」が締結され、今後はここを唯一の交易拠点とすることが取り決められた。キャフタは現在のモンゴル国の首都ウランバートルから北に約三百五十キロメートルの地点にあり、新規にロシアによって建設された町である。その南側すぐ目と鼻の先には中国商人が居住する買売城（マイマイチン）があった。その距離わずか二百メートルである。その後ここを舞台としてキャフタ貿易と呼ばれる経済活動が活況を呈した。交易品目としてはロシア側商品が主として毛皮であり、後には毛織物、綿製品が増加したのに対し、清国側では初期には南京木綿などの商品も扱われたが、一貫して最も大きな比重を占めたのは茶葉（チャイ）であった。

キャフタで国境貿易に従事した中国商人は山西省出身のいわゆる「晋商」である。なかでも「北常」として知られる榆次車輦の常家がその最大勢力であった。彼らの手によってキャフタ貿易言語のマニュアルが作成された。キャフタ貿易言語のベースは、南方のポルトガル語や英語とは異なり、当然ながらロシア語であった。十九世紀初頭にロシア使節に随行してキャフタを訪れたドイツ生まれの東洋学者ユリウス・クラブロートの旅行記によれば、彼ら晋商はモンゴル語を喋るほか、彼らの内かなりの数がロシア語も話したことを記録している。それは通訳の助けを借りずに商売を行うためであったが、ロシア商人のほうは全く中国語を解しなかったので、この不十分なロシア語の知識だけでも中国商人のほうに際だった優越性を与えることになったのである。ではかれら山西出身の商人たちがどのようにしてロシア語を学んだかといえば、南方のピジンと同じくキャフタ貿易用のロシア語マニュアルが存在したのである。そのことはロシア人の旅行記にも言及されているが、実物もロシアと中国に何点か残されている。そのうちの一冊には『鄂羅斯番語』という題がついており、下部に「凝瑞堂」とある（図三）。おそらくこの商店で用いられたものに違いない。南方のマニュアルとの相違点は、印刷されず写本であるという点である。おそらく南方のピジンほどの需要がなく、写本による流通で十分だったためであろう。使用者は晋商であるから、その漢字表記が山西方言を用いているのは当然である。作成者もまた山西商人自身であったにちがいない。山西方言はかつて北京語などとともに官話方言の一つとされていたが、現在では独立した方言と

して「晋語」の名称が与えられている。その最大の特徴は官話には見られない入声を保存していることで、声調は基本的に五つあり、六つ七つを区別する地域もある。その分布範囲は山西省に止まらず、内モンゴルや、陝西省、河南省、河北省の隣接地域でも話されている。キャフタ交易言語マニュアルは、この山西方言の字音によって漢字表記されているため、今日われわれがこの材料を研究しようとする場合、若干の困難が伴うのはやむを得ない。

上に挙げたピジン・イングリッシュの例にならって、以下この言語の語彙をいくつか出してみよう。「天」には二つ異なる語が宛ててある。一つは「納念必」(na? nie-pie? = на небе)とあり、もう一つは「呆普」(tai p'u = дай Бог)とある。前者はロシア語 небо (天) の処格形の前に場所を示す前置詞 на を前接させたかたちで、直訳すればすれば「天(空)で」となる。単独で небо を出さずに на небе としたのは、実際に用いること

の多いかたちを出したものであろうか。後者はそれとまったく異なる。ロシア語 дай Бог は「神よ願わくは」のような意味だが、中国語の「天」にも主宰神に対する呼びかけの言い方があるのに対応するものであろう。山西方言の発音には仮に『太原方言詞典』(1994年)の表記を用いた。na? のように音節末に声門閉鎖の記号(?)があるものは、上に触れた入声で、短く発音される。また念の末尾音 n が脱落して nie のように読まれるのも山西方言の特徴である。もう少し例を出すと、「地」が「几明亮」(tei-miŋ-liɛ̃ = земля)、「日」が「順子」(suŋ-tsi = солнце)、「月」が「面昔子」(mie-cie?-tsi = месяц)となっている。また「達子」に「満官而史坎」(mæ̃-kuæ̃-ər-si-k'æ̃ = монгошка)、「旗人」に「満洲兒史坎」(mæ̃-tsau-ər-si-k'æ̃ = маньчжуршка) を宛ててあるのは面白い。この場合は民族を示す語に「史坎」を付けてあるということにな



図三

るが、「史坎」は他の一般名詞にも広く用いられる、キャフタのピジン・ロシア語に独特の表現といえる。職業をふくめて一般に人を表す場合は「六地」(liəu-ti=люди)を後接させる。単数の場合でも複数のлюдиを用いるのもやはりピジンたる所以である。たとえば「跑信人」(郵便配達夫)は「棒池内六地」(pẽ-ts'ɣ-nuei liəu-ti=почный люди)と書いてある。正規のロシア語ならпочтальонという語もあるが、それは用いていない。

キャフタの露清貿易は規模の面で広州や上海には及ばなかったものの、ともに一種のピジンが使用されたという点で南北は共通している。なおかつ、この種の接触言語であるピジンは、世界的に見ればみな口頭で伝承されるのが一般であるのに、中国では南北を問わず、それを学習するための漢字で表記されたマニュアルが作られたことは非常に特異な現象と言わねばならない。さらに興味深いことには、学習者は音写されたピジン語彙を、中国式の発音で音読したため、中国特有のピジンが発展することになったことも、漢字によるマニュアルの存在が生み出した副産物として注意すべき事柄であろう。